

Title	翻訳 ペトルス・ ニコラウス羅訳『アリストテレスの神学』 第十章 [45v] - [53r]
Sub Title	The Latin version of the "Theology of Aristotle", ch. 10 [45v]-[53r]
Author	堀江, 聡(Horie, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2006
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 No.21 (2006. 5) ,p.1- 21
JaLC DOI	
Abstract	ここに邦訳する世界初訳のテキストは、1519年にファウエンツァ出身ピエール・ ニコラ・ カステッラーニによってラテン語に訳された『アリストテレスの神学』全14章のうちの第十章十三節までである。この書は錯綜した素性をもつ。紀元3世紀後半、プロティノスによってギリシア語で記された『エンネアデス』の後半部分、第4～6『エンネアス』の翻案であるが、これとは別の、9世紀前半バグダードで成立した「流布版『アリストテレスの神学』」と呼ばれ慣されるアラビア語の翻案もある。後者の出自にすら定説はなく、世界的に議論が喧しい現状であるが、前者の素性はそれに輪をかけて謎に包まれている。研究が進捗しない原因として、このラテン語版の近現代語訳が一つもないことが挙げられる。さらに近現代語訳がない理由は、ラテン語版に先行し、全体の約3/4残存するいわゆるユダヤ・ アラビア語（ヘブライ文字表記のアラビア語）版の校訂（プラス翻訳?）をフェントンがかなり以前に予告したにもかかわらず、未だ完了していないことによる。流布版は全10章であるのに対し、ラテン語版は14章からなるので、『アリストテレスの神学』の「長大版」（longerversion）と称されている。とはいえ、流布版から省略された箇所も多々あるので、単純な拡大版でないことは注意を要する。第一章から第八章までは、両版が一対一対応であったのに対し、長大版第九章も第十章も、相変わらず流布版第八章のパラフレーズの続きであることが判明した。ラヴェンナのフランチェスコ・ローズィがダマスカスの図書館で発見したアラビア語写本を、キプロス出身のユダヤ人医師モーセス・ロヴァスを雇ってイタリア語、ないしは粗雑なラテン語に訳させたものを、ニコラが彫琢することによってラテン語版が成立した。それをさらに洗練されたラテン語に移したジャック・シャルパンティエの訳もある。流布版が長大版に先行するという説が優勢ではあるが、長大版から流布版に移行したという主張が消えたわけではない。長大版の研究はまだ緒に就いた

ばかりなのである。底本には、Sapientissimi philosophi Aristotelis stagiritae. Theologia sive misticaphilosophia secundum Aegyptios noviter reperta et in Latinum castigatissimere dacta, ecphraste Petro Nicolao ex Castellaniis, Roma, 1519 を用い、常時 Libri quattuordecim qui Aristotelis esse dicuntur, de secretiore parte divinae sapientiae secundum Aegyptios, per Iacobum Carpentarium, Paris, 1571 を参照した⁽¹⁰⁾。底本の二コラ版は句読点が不正確で誤植も散見されるので、シャルパンティエ版を援用しつつ文脈を解釈しなければならなかった。流布版『アリストテレスの神学』に対応箇所がない部分は太字で明示した。ただし、解釈者の視点の差によって、太字部分の確定は議論の余地のないものとはなりえないことをお断りしておきたい。私の立場は、哲学的に重要で長大版に特有な思想を識別できれば、それで充分というものである。その思想の独自性をことさら強調したい箇所には下線を施してみた。[] 内はフォリオ数である。言うまでもないが、見開きにすれば、r は右頁、v は次の紙の左頁になるのは注意を要する。{ } 内は文意を明確にするための訳者による補足である。原文における名詞の複数形は、和訳でも愚直に保存するよう努めたが、意味が通じる箇所では、もちろん日本語表現の審美的観点から、そのかぎりではない。今回訳出した長大版第十章第一節から十三節まででは、流布版のパラフレーズというよりも、ほとんどが脱線というか、新たな教説の挿入である。その意味で、長大版独自の思想を探るには絶好の箇所であると言える。とりわけ、形而上学的体系全体が提示されているので、その全体を素描してみることにする。まず頂点には、「神」である「第一の創始者」が位置し、それは「第一の存在者」、「第一能動者」、「真の能動者」、「両世界の創始者」、「第一位の創始者」、「神の知性」といった、さまざまな名称によって言い換えられている。次の階層は、長大版独自の展開として、かねてより注目してきた「神の言葉」、「神的な言葉」の階層である。神と知性の間に別の存立を仮設しない点では、流布版は『エンネアデス』から逸脱していなかったが、『エンネアデス』にも流布版にも対応箇所をもたない特有の思想として、創造主と知性の間に指定される言葉 (kalimah, ἰαλίμα) の教説がポリソフ以来夙に指摘されてきた。これは、万物を命令形「在れ!」(kun) の一言で創造する神の言葉であり、神の意志、命令と関連する。事実、[52r] には、「意志」「命令」「知恵の指図」の語が現れている。「創造する言葉」「懐胎された言葉」「最も完全な言葉」という表現も見られる。「第一の形相」という言い換えからは、その形相の担い手である基体が要請されるらしい。それが [46v] では「精神」とされる。「第一位の精神」「首位の精神」のように形容される場合もある。その次には、「能動知性」

	が来る。「第一位の能動知性」「第一能動知性」「第一知性」「首位の高貴な知性」「高所の知性」「純粹で絶対的な知性」，さらに「存在者そのもの」「第一の被造物」も同じものを指し示していると思われる。次は，「可能知性」であり，「第二知性」「第二位の知性」「自然的知性」「質料的知性」などとも呼ばれるが，いわゆる「われわれの知性」「知性的魂」である。これがさらに，思考の座であり推論的探求を行う「理性的魂」と同一視されているようである。この下に，表象し評価する能力をもつ「感覺的魂」があり，これはおそらく「前進する力」「呼吸する力」をも含む動物の魂に相当するのだろう。そして，増殖力をもつ「植物的魂」，それから，天の円環運動を司る「自然」，最後に「下位の自然」として，多様な運動と形態を備え生成する「複合物体」と「構成要素」が続くのである。これら階層間の連関は，上から下へ下降するに伴い，次第に暗く弱まる「光」，「生命」，「力」の「照明・発出・流入」と「物的粗雑さ」の増大，その裏返しである下位のものの上位のものへ還帰への希求という新プラトン主義的常套句で説明される。しかも，「産出したものを愛し完成させる」という表現から察するに，創造は一度では成就せず，少なくとも論理的には二段階の過程を経るというプロティノス流の二相性の原理が貫徹していると予想される。階層から階層へと転送されてゆく力の連鎖は，途切れることなく上から下まで連なり，「神の言葉の隠然たる影響」により，すべてが「靈的な色で塗られている」世界が現出する。とはいえ，「靈的世界」から隔たった理性的魂は，つねに「無知，過誤，忘却，不確実，逸脱，腐敗」の可能性に晒されているゆえ「学問による教科」が必要であり，その目指すべく魂の完成とは，「自己自身へと還帰し」，「ダイモーンの靈に類同化し」，「光り輝く世界」たる能動知性と「愛し愛されるように」一つの実体へと結合し，「光で沸き立ち燃え立つ」「諸真理」を觀照することにあると言えよう。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20060531-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

翻訳

ペトルス・ニコラウス羅訳『アリストテレスの神学』

第十章 [45^v] – [53^r]

堀 江 聡 訳

解題

ここに邦訳する世界初訳のテキストは、1519年にファウエンツァ出身ピエール・ニコラ・カステッラーニによってラテン語に訳された『アリストテレスの神学』全14章のうちの第十章十三節までである⁽¹⁾。この書は錯綜した素性をもつ。紀元3世紀後半、プロティノスによってギリシア語で記された『エンネアデス』の後半部分、第4～6『エンネアス』の翻案であるが、これとは別の、9世紀前半バグダードで成立した「流布版『アリストテレスの神学』」と呼ば慣わされるアラビア語の翻案もある⁽²⁾。後者の

-
- (1) 第一章・第二章の拙訳は、「ペトルス・ニコラウス羅訳『アリストテレスの神学』第一章・第二章」、『西洋精神史における言語観の変遷』、慶應義塾大学言語文化研究所（慶應義塾大学出版会）、2004年、115-145頁に、第三章・第四章の拙訳は、『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』20、2005年、17-48頁に、第五章・第六章のそれは、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』37、2006年、89-109頁に掲載されている。
- (2) 流布版『アリストテレスの神学』全10章の邦訳は以下の紀要で発表されている。第一章（岩見隆・高田康一・野元晋・堀江聡訳）『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』13、1998年、123-141頁。第二章（岩見隆・高田康一・木下雄介・堀江聡訳）『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』30、1998年、219-240頁。第三章（岩見隆・

出自にすら定説はなく、世界的に議論が喧しい現状であるが⁽³⁾、前者の素性はそれに輪をかけて謎に包まれている。研究が進捗しない原因として、このラテン語版の近現代語訳が一つもないことが挙げられる。さらに近現代語訳がない理由は、ラテン語版に先行し、全体の約3/4残存するいわゆるユダヤ・アラビア語（ヘブライ文字表記のアラビア語）版⁽⁴⁾の校訂（プ

高田康一・木下雄介・堀江聡訳）『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』14, 1999年, 55-69頁。第四～第六章（岩見隆・大川京・高田康一・木下雄介・堀江聡訳）『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』31, 1999年, 115-154頁。第七章（岩見隆・大川京・高田康一・木下雄介・堀江聡訳）『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』15, 2000年, 92-106頁。第八章・第九章（岩見隆・大川京・高田康一・木下雄介・野元晋・堀江聡訳）『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』32, 2000年, 121-186頁。第十章（岩見隆・大川京・高田康一・木下雄介・野元晋・堀江聡訳）『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』33, 2001年, 161-205頁。序文・問題一覧（岩見隆・大川京・高田康一・木下雄介・野元晋・堀江聡訳）『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』17, 2002年, 189-211頁。流布版『神学』には、明白に認知されているかぎり、文体面でも術語面でも類似した二人の兄弟がいる。『(正体不明の)ギリシアの賢者の言葉』と伝ファーラービー『神学論攷』がそれである。この両論攷は流布版『神学』と相俟って、原『神学』を想定せしめる。三者はいずれも『エンネアデス』の改作であるが、互いにほとんど重複していないゆえ、原『神学』がある時点で少なくとも三者に分裂したとみなすのが妥当である。G. Endress, *Proclus Arabus*, Beirut, 1973の包括的研究によれば、これらはさらに12世紀にクレモナのゲラルドゥスによってトレドでラテン語に翻訳された *Liber de causis*（『原因論』）のアラビア語原典 *Kalam fi mahd al-khayr*（『純粹善論』）、及びプロクロス『神学綱要』全211命題中20強の命題が現存しているアラビア語訳の語彙や文体とも共通であり、いずれも9世紀前半のキンディーを核とするバグダード翻訳チームに特徴的なものだという。『ギリシアの賢者の言葉』の拙訳は、『西洋精神史における言語観の諸相』慶應義塾大学出版会, 2002年, 209-225頁に、『神学論攷』の拙訳は、『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』17, 2002年, 157-187頁に掲載。

- (3) 拙論「アラビア語版『アリストテレスの神学』研究展望」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』30, 1998年, 201-217頁参照。

- (4) サンクト・ペテルブルクでの発見がボリスフにより1930年に報告され、再び

ラス翻訳?) をフェントンがかなり以前に予告したにもかかわらず、未だ完了していないことによる⁽⁵⁾。流布版は全10章であるのに対し、ラテン語版は14章からなるので、『アリストテレスの神学』の「長大版」(longer version) と称されている⁽⁶⁾。とはいえ、流布版から省略された箇所も多々あるので、単純な拡大版でないことは注意を要する。第一章から第八章までは、両版が一对一对応であったのに対し、長大版第九章も第十章も、相変わらず流布版第八章のパラフレーズの続きであることが判明した。

ラヴェンナのフランチェスコ・ローズィがダマスクスの図書館で発見したアラビア語写本を、キプロス出身のユダヤ人医師モーセス・ロヴァス⁽⁷⁾

同所で別の断片がフェントンにより、さらにオックスフォードとニューヨークで保管されているカイロ・ゲニザ写本のうちからも新たな断片が1980年にフェントンによって同定されている。Cf. P. B. Fenton, *The Arabic and Hebrew Versions of the Theology of Aristotle*, in: *Pseudo-Aristotle in the Middle-Ages. The Theology and Other Texts*, London, 1986, pp.241-264.

- (5) 長大版の研究はフェントンの校訂が出版されるまで留保するというのが、世界的な了解事項になってしまっている。たとえば, H. Daiber, *Buchbesprechung: Pseudo-Aristotle in the Middle Ages. The Theology and the Other Texts, Der Islam* 65, 1988, p.133。
- (6) プロティノス『エンネアデス』のアリストテレス主義化が流布版『アリストテレスの神学』ですでに認められるが、長大版はその偏向(改良?)をさらに推し進めているとの印象を受ける。10章から14章にしているのも、アリストテレスの真作『形而上学』14巻の巻数に合わせた結果なのであろうか。
- (7) モーセス・ロヴァスは、ヘブライ語訳をも作成した事実が、フランス国立図書館(BN)ヘブライ語写本996のヨセフ・ベン・シェーム・トーブの『ニコマコス倫理学』註釈欄外に記された残存断片から突き止められている。Fenton, art. cit., pp.241; 258-9, 及び M. Aouad, « *La théologie d'Aristote et autres textes du Plotinus arabus* », in: *Dictionnaire des philosophes antiques*, publié sous la dir. de R. Goulet, t. I, Paris, 1989, pp.565 参照。私がパリのリシュリユー通りのBN東洋写本館蔵の現物を閲覧したところ、上記写本には次のような説明が付されていた。
« Ce ms. semble avoir été écrit en Espagne du vivant de l'auteur. On y trouve

を雇ってイタリア語、ないしは粗雑なラテン語に訳させたものを、ニコラが彫琢することによってラテン語版が成立した。それをさらに洗練されたラテン語に移したジャック・シャルパンティエの訳もある⁽⁸⁾。流布版が長大版に先行するという説が優勢ではあるが、長大版から流布版に移行したという主張が消えたわけではない。長大版の研究はまだ緒に就いたばかりなのである⁽⁹⁾。

底本には, *Sapientissimi philosophi Aristotelis stagiritae. Theologia sive mistica philosophia secundum Aegyptios noviter reperta et in Latinum castigatissime*

plusieurs notes marginales de la main de Moïse Rovas, médecin juif de l'île de Chypre, que Franciscus Roseus, de Ravenne, chargea à Damas de la traduction des quatorze livres de la Théologie attribuée à Aristote. » ロヴァス訳以外に、少なくともシェーム・トープ・イブン・ファラケーラー (ca. 1225-1291) によるヘブライ語抄訳の存在も確認されている (Y. Tzvi Langermann, *A New Hebrew Passage from the Theology, Arabic Sciences and Philosophy* 9, 1999, p.253)。

- (8) これらのラテン語訳は、アリストテレス偽書の疑いをかけられつつも、1578年から1654年まで (1578年リヨン版 (リプリント1581年), 1580年リヨン版, 1593年フランクフルト版, 1605年ジェノヴァ版, 1619・1629・1639・1654年パリ版), 『アリストテレス著作集』に所収され繰り返し出版されていた。最終的にトマス・テイラーによって、プロティノスの著作に基づく偽書であることが証明されるのは、1812年になってのことであるという。このように長らくアリストテレスの正典から外されずに済んだことには、ニコラ版緒言でローズィが述べたもっともらしい仮説が一役買っている。すなわち、『アリストテレスの神学』第九章の冒頭に欠損があるのは、ストラボンが伝えるように、他のアリストテレスの弟子向けの専門著作同様、ネレウスの子孫が古トロヤ近郊スケプシスの地中に紀元前3～1世紀の約200年間、略奪を恐れて隠した結果の虫喰い状態に起因するものだというのである (J. Kraye, *The Pseudo-Aristotelian Theology in Sixteenth- and Seventeenth-Century Europe*, in: *Pseudo-Aristotle in the Middle-Ages. The Theology and Other Texts*, London, 1986, pp.265-286)。

- (9) F. W. Zimmermann, *The Origins of the So-called Theology of Aristotle*, in: *Pseudo-Aristotle in the Middle Ages: The Theology and Other Texts*, London, 1986, pp.165; 195; 208は、長大版の成立を9世紀後半と見積もっている。

redacta, ecphraste Petro Nicolao ex Castellaniis, Roma, 1519 を用い、常時 *Libri quattuordecim qui Aristotelis esse dicuntur, de secretiore parte divinae sapientiae secundum Aegyptios*, per Iacobum Carpentarium, Paris, 1571 を参照した⁽¹⁰⁾。底本のニコラ版は句読点が不正確で誤植も散見されるので、シャルパンティエ版を援用しつつ文脈を解釈しなければならなかった。流布版『アリストテレスの神学』に対応箇所がない部分は太字で明示した。ただし、解釈者の視点の差によって、太字部分の確定は議論の余地のないものとはなりえないことをお断りしておきたい。私の立場は、哲学的に重要で長大版に特有な思想を識別できれば、それで充分というものである⁽¹¹⁾。その思想の独自性をことさら強調したい箇所には下線を施してみた。[] 内はフォリオ数である。言うまでもないが、見開きにすれば、rは右頁、vは次の紙の左頁になるのは注意を要する。{ } 内は文意を明確にするための訳者による補足である。原文における名詞の複数形は、和訳でも愚直に保存するよう努めたが、意味が通じる箇所では、もちろん日本語表現の審美的観点から、そのかぎりではない。

今回訳出した長大版第十章第一節から十三節まででは、流布版のパラフレーズというよりも、ほとんどが脱線というか、新たな教説の挿入である。その意味で、長大版独自の思想を探るには絶好の箇所であると言えよう。とりわけ、形而上学的体系全体が提示されているので、その全体を素描してみることにする。

(10) シャルパンティエ版の発刊年は、現物を確認したところ1572年ではなく、1571年である。Fenton, art. cit., p.241, Kraye, art. cit., p.266 の不注意な瑕疵が、ダイバー (art. cit., p.134) やアダムソン (P. Adamson, *The Arabic Plotinus. A Philosophical Study of the Theology of Aristotle*, London, 2002, p.23) にも感染しているようである。

(11) 流布版の方の哲学的意義の一例については、拙論「『アリストテレスの神学』から古代末期の始原論への遡源」『中世思想研究』45号、2003年、41-56頁を参照。

まず頂点には、「神」である「第一の創始者」が位置し、それは「第一の存在者」、「第一能動者」、「真の能動者」、「両世界の創始者」、「第一位の創始者」、「神的知性」といった、さまざまな名称によって言い換えられている。

次の階層は、長大版独自の展開として、かねてより注目してきた「神の言葉」、「神的な言葉」の階層である。神と知性の間に別の存立を仮設しない点では、流布版は『エンネアデス』から逸脱していなかったが、『エンネアデス』にも流布版にも対応箇所をもたない特有の思想として、創造主と知性の間に措定される言葉（*kalimah*, λόγος）の教説がボリソフ以来夙に指摘されてきた⁽¹²⁾。これは、万物を命令形「在れ!」（*kun*）の一言で創造する神の言葉であり、神の意志、命令と関連する。事実、[52^r]には、「意志」「命令」「知恵の指図」の語が現れている。「創造する言葉」「懐胎された言葉」「最も完全な言葉」という表現も見られる。「第一の形相」という言い換えからは、その形相の担い手である基体が要請されるらしい。それが[46^v]では「精神」とされる。「第一位の精神」「首位の精神」のように形容される場合もある。

その次には、「能動知性」が来る。「第一位の能動知性」「第一能動知性」「第一知性」「首位の高貴な知性」「高所の知性」「純粹で絶対的な知性」、さらに「存在者そのもの」「第一の被造物」も同じものを指し示していると思われる。

次は、「可能知性」であり、「第二知性」「第二位の知性」「自然的知性」「質料的知性」などとも呼ばれるが、いわゆる「われわれの知性」「知性的魂」

(12) Fenton, art. cit., p.243; Zimmermann, art. cit., pp.193; 196-206; M. Aouad, « *La théologie d'Aristote et autres textes du Plotinus arabus* », in: *Dictionnaire des philosophes antiques*, publié sous la dir. de R. Goulet, t. I, Paris, 1989, pp.567-569; S. Pines, La longue recension de la *Théologie d'Aristote* dans ses rapports avec la doctrine ismaélienne, *Revue des études islamiques* 22, 1954, pp. 8-13.

である。これがさらに、思考の座であり推論的探求を行う「理性的魂」と同一視されているようである。

この下に、表象し評価する能力をもつ「感覚的魂」があり、これはおそらく「前進する力」「呼吸する力」をも含む動物の魂に相当するのだろう。そして、増殖力をもつ「植物的魂」、それから、天の円環運動を司る「自然」、最後に「下位の自然」として、多様な運動と形態を備え生成する「複合物体」と「構成要素」が続くのである。

これら階層間の連関は、上から下へ下降するに伴い、次第に暗く弱まる「光」、「生命」、「力」の「照明・発出・流入」と「物体的粗雑さ」の増大、その裏返しである下位のものの上位のものへ還帰への希求という新プラトン主義的常套句で説明される。しかも、「産出したものを愛し完成させる」という表現から察するに、創造は一度では成就せず、少なくとも論理的には二段階の過程を経るというプロティノス流の二相性の原理が貫徹していると予想される。階層から階層へと転送されてゆく力の連鎖は、途切れることなく上から下まで連なり、「神の言葉の隠然たる影響」により、すべてが「靈的な色で塗られている」世界が現出する。とはいえ、「靈的世界」から隔たった理性的魂は、つねに「無知、過誤、忘却、不確実、逸脱、腐敗」の可能性に晒されているゆえ「学問による教科」が必要であり、その目指すべく魂の完成とは、「自己自身へと還帰し」、「ダイモーンの靈に類同化し」、「光り輝く世界」たる能動知性と「愛し愛されるように」一つの实体へと結合し、「光で沸き立ち燃え立つ」「諸真理」を觀照することにあると言えよう。

第十章⁽¹³⁾

第一節：神は最高度に完全である，そして，第一の被造物におけるその流入は無限であるが，他のものどもにおいては有限である。

[46^r] 第一の創始者は，完全性において最大であるかぎり，栄光において最高である。そして，そうであるのは，完成されうる他のいかなるものをも完成させるからである。また，それらを完成させるのは，それらすべてを創出するからである。そしてそれは，宇宙と両世界の能動者として，存在者のあらゆる本質の始原すべてを創造するからである。ところで，始めに，生命と力 (*potentia*) と価値 (*dignitas*) を注ぎ込むのが相応しいのであるが，それぞれのものに，その容量に応じて段差をつけて流れ込む。したがって，それに近接しているものほど，他のものより受容能力がある。というのもじっさい，万物のうちでそのようなものが，第一に受けとるものであり，実体の価値と堅固さの永続性のうえで，それに最も近いものだからである。第一の創始者と他のもろもろの産出されたものの中にある中間者は，それら他のものに先駆けて，生命と価値の流入を受けとり，次にそれらを残りの下位のものどもに注ぎ込む。というのも，この第一の被造物は，その霊的で単純な絶対的本質において，光と真理のこの上ない力強さを含んでいるからである。そして，力強さと誉れの段階のうえで，その下に後続するものは，完全な物体性と真の⁽¹⁴⁾合成へと，より接近した，より乏しい光を帯びている。そして，この第一のものは，他のすべての下位の实体より先なる最も完全な实体として，第一の形相のみの下にあり，そ

(13) 長大版第10章のパラフレーズは，流布版第8章の途中，バダウィー版 p.108, 1.5 から始まる。

(14) vera は，verae に読み替える。

れの言葉に接している。第一の被造物において受けとられる完全性の流入は無限なのであるが、下位に続く被造物である第二知性に伝達されると、永続性への欲求を可能にする光ではあるが、有限となる。というのも、第一の被造物は、第二知性が混乱しないように少しずつ第二知性に流入するからである。他方、光が消失しないように、{流入するのである}。光の注入が、任意の霊的実体のうちに、その模倣による、永遠性への欲求を掻き立てる。だが {光の注入の} 中断は、万有の終止と消滅の原因である。だが、このような光は燃え立ち、大きく崇高ではあるけれども、無限である己の創造主の一性や言葉と同等の模倣では決してない [46^v]。それゆえまた、万有へのその最善の流入は永続的であり、朽ちることなく、他所に依存することなく、万物にとって、第一の存在者そのものを欲求することの原因である。

第二節：神はいかなるしかたで、他の諸々の存在者より

先なのか、存在者の階層はどのようなものか。

神は第一の存在者 (*ens primum*) であるが、それはつまり、創造の先行性においてのことである。というのも、或る実体は、或る実体に先行するからである。たとえば、単純実体は複合実体に、能動知性は魂に先行するが、時間的先行性においてそうなのではなく、すでにわれわれが認めたように、本質と本性の⁽¹⁵⁾先行性においてなのである。種に対する類の {先行性が} そのようなものである。だが、何かが他のものに先行するが、それは時間においてではないことの論拠に、或るものどもが時間を超え時間の原因である場合、いかにして時間において先行できようか {と問える}。さて、或るものが他のものに時間的に先行すると語りうるのは、両者が時間に包摂され、一方が他方に先立つ時間において存在していた場合にかぎるとすでに証明されている。したがって、諸本質 (*essentia*) のうちで端

(15) nature は、naturae と読む。

的に第一であるのが精神（mens）であるが、これが「首位の」（princeps）と言われるのは、神の言葉（verbum）、第一の形相の基体というものと同一ではあるが、最高類として、すべての輝く（illustres）絶対的で純粋な諸実体を含むものだからである。かの精神に比すれば第二位の知性が、その種のごときものとして、それに続き、自己の基体をつくり上げ、また形相も供され、太陽からの光線が水晶に反射するように、知性的な根からの光がそれに内在する。さらに、それから発出するのが理性的魂の本質であるが、その光はいつそう仄かで暁の薄明かりに似ている。それゆえ、その魂には忘却と無知が生じる結果、学問による教化、保存のための記憶、自己を支え導くための思考が必要になる。さらに、理性的魂の光から感覚的魂という本性が現れる。これは〔47〕先の魂以上に弱い光を帯びている。それゆえ、これは推論的探求を欠いており、ただ表象し評価するだけのものである。さらには、その光から植物的魂という本性が流出する。これは、純粹で絶対的な光から大いに隔たっているので、粗雑なままであり、前進する力、呼吸する力を欠き、ただ増殖力のみ保持している。その後、この光から自然が生ずるが、これは、なおいつそう第一等の光からの間隙ゆえに非物体的微細さを欠き、物体的粗雑さと三次元的分量、すなわち長さ・幅・深さを受けとり、或る運動、すなわち円環的で単純にして止むことのない運動で動くのである。天の運動がそうなのであるが、生成消滅が繰り返し継続するべく創始者によってそのように据え置かれたのである。また、均質で他のものと対立しない運動で動く。天は生成するもの・自然的なものを含むものであり、個々のものを複合体における諸形相の状態に応じて保持するのであるから、万一、固有の運動から逸脱したならば、それらすべては滅びるであろう。さらに、この巡回する天の自然から、多様な形態をもち多様な運動をする下位の自然が発出する。この自然の諸運動の相互の対立が生成消滅の原因である。

第三節：知性界は天界に流出し、また天界は月下の世界に

流出する、そして、それはいかにしてか

霊的世界の本性が、永続的に旋回する物質的〔本性〕の秩序を据え置いた。その循環運行が、神の言葉からの隠れた影響によって、下位のものどもの継続的变化を維持し、そうして、生成消滅を維持するのである。そして、そのように諸運動が接続するのであれば、生じたものは、己の時間において存続し類似のものを結びつけるために、それぞれの種においても個においても霊的な色で塗られることになる。というのもじっさい、天の本性は〔47^v〕、上方の霊的にして、首位の知性に依存する永続的諸本質を通じて、しかしまた、言葉を通じて神からそれらに植えつけられた力によって、下位の世界の、生成し可感的な複合的諸物体や構成要素を中空から中心へ動かすからである。それゆえに、これらの実体は単純で卓越しており、不変なものとしてある。というのも、これらの原因は神の言葉に直結しているかぎり、確乎としているからである。それゆえまた、不変なのである。さもなくば、それらは決して一様であるのでも、正しくあるのでもないことになってしまうからである。というのも、知性は本質において完全なので、その産物も絶対的でなければならないからである。知性は神の言葉に近接しているがゆえに、また力の不断かつ無限の注入を受けるので、他の協同能動者を必要としない。だが、すでに述べられたように、他の下位の諸原因への流入は、神を愛することに対して有限である。〔下位の諸原因が力を〕受けとることによって掻き乱されないようにである。それらのうちの物的諸実体は、生成するものであり、その力の受容において大に弱いのであるが、知性はそのような最下の諸原因を助ける。たとえば水の中で明らかであるが、水から他の動物よりむしろ或る動物が時宜になんて生ずるのである。

第四節：神のみが理性的魂の眞の創始者である。

植物、獸、鉱物の本性は、理性的魂の産物であるが、理性的な魂とは差異をもってつくられている。その理性的魂自身、能動知性によってつくられた、能動知性の産物である。眞の意味での能動者はすべて、形相の基体となる、事物の実体としての構成要素と、構成要素を維持する形相を産出するのに、知性は構成要素も魂の形相もつくらないのであるから、知性は理性的魂を眞につくるのではない。それゆえ知性は、知性をつくる第一能動者と、最も近い〔能動者〕である最終能動者との中間者ではあるけれど、眞の意味で魂をつくる能動者ではない〔48〕。第一のものは、眞の能動者たる神である。本質をつくるのは、それ自身が眞の本質だからである。そして、その神なしに何か何から産出されることはありえない。

第五節：魂の照明には三段階ある、それはどのようなものか。

すべての光は他の光を伝播するが、第一の光は最後の光より完全であり、中間の光は両端の光に与っている。さらにまた、第二の知性へと伝播し植え込まれた光には三段階あるのがふさわしい。つまり、言葉に最も近い最高の光、これは眞の意味での絶対的な光、光り輝く世界 (mundus lumineus) と呼ばれている。そして、他の段階は最下のものであり、さらに別の段階は中間のものである。それゆえまた魂のうちでも、或る魂が最高の段階の光を汲みとると、その霊は魂の完成に加わり、魂はダイモーンの霊に (spiritibus demonicis) 類同化し、考察において諸真理に達し、創造主の神性において眺めるものとなる。というのもじっさい、この知性に由来する、眞の理性と有徳の行為の働きは、純粹で絶対的な知性との、その結合から生ずるからである。その〔純粹で絶対的な知性〕は、完全性と純粹さにおいて万物のうちで最高の創始者の最も完全な——完全性そのものの最も近くにある業でさえ完全なのであるから——言葉の最も近くにある。だが、このような言葉は、その首位の高貴な知性を包含している。自身と

決して名を同じくしないか、同名異義的なのであるが。最下の段階に据え置かれ、首位の知性から隔たっている魂には、無知、過誤、忘却、不確実、逸脱、腐敗が生ずる。だが、中間の魂は両極に与り、一層そちらへと傾く方に、より一層与るのである。感覺的、植物的、鉱物的魂の各々の種も、段階の差異によって三分割されているのだが、そういう関係にある。

第六節：知性は神の似像であり、魂はいわば知性の表現

された言葉として、知性の似像である。

[48^v] 実体の単純性・複合性の大小は、神的な言葉への遠近に比例する。したがって、どんな被造物でも神的な言葉により近いかがり、靈的絶対的単純性において、先行するのであり、他方、より遠いかがり、単純性は減少し、相応の物体性により近づくことが至当である。そのようにまた光の流入も、万物に、個々のものの容量に応じ、先に記された諸段階に即して内在する。したがって、容量のより大きいものはより近いのであり、第一受容者は、本質の高貴さゆえに最も近くにあり、神と、己によって産出されたものどもの中間にあることになる。かのものからの生命の流入を受け取り、その受け取ったものを次に、下位に存在する他のものに注ぎ込む。それが下位のものより完全であるのは、それに先行するからである。神の段階がそれを通じて顕れる、神の第一の模倣として、より完全なのである。そのようにまた、知性も魂に注ぎ込むのがふさわしい。というのも魂は、表出された言葉のごとくに、知性の模倣となっているからである。知性全体に上方から助けられ、魂の活動全体がまた、他のものどもに流れ出る。その知性は魂に対して、火と、火から生じた熱のような関係にある。熱は他のものに受け取られて別のものになる。知性が魂を産出するのだが、知性の力のいかなるものも外に移動することはない。

第七節：理性的魂は感覺的魂を産み出し、後者は前者を必要と

するが、いかにしてか。そして、前者に結びつく。

〔49〕この劣った世界にある知性的魂（anima intellectualis）は、思考によって直知する。というのも、その知性は第一 {知性} から派生したので、衰えており、質料的で力がないからである。まず、知性は理性的魂を産み出すと、父が息子をそうするように、完成させる。他方、このような魂は、感覺的魂を完成させる。後者を産み出したからであり、逆に後者は前者を必要とするからである。それは、諸始原を眺めるために、理性的魂が感覺的魂によって呼び覚まされる場合であって、理性的魂なしでは、{感覺的魂は} いかなる始原にも目を向けることがないし、また、事物のいかなる形象によっても刻印されることがないであろう。その結果、第一能動知性から普遍的なものどもを受容することができないことになる。理性的な魂が感覺的な魂に結びついていることは、以下のことから明らかである。すなわち、さもなくば、{理性的魂は} 感覺受動にも自然的快樂にも同意することもなく、勝利や支配を欲することもなく、学問的訓練も必要なく、名誉を熱望することも決してなく、和音や肉体的美しさを喜ぶこともなく、人間本性への傾向性をもつことも全くなく、高所の眺めや逃走の喜びを思い浮かべることもないだろう。健康や苦痛なき状態といった、肉体の便宜をはかることも少しもせず、理性的なものだけをもつことになるだろう。というのも、これらの活動が理性的魂に生ずるのは、感覺的魂との交わりによるからである。もっとも、それは、視覚・味覚・触覚対象その他、可感的な自然的性質よりも純粹であり、高次のものなのであるが。たしかに、これらのものに結びついていなければ、飢えて飽食を欲することも、労働して休息を欲することも、病に罹り健康を欲することも、性交を渴することも、その他これに類することもしないであろう。それから、理性的魂は感覺的魂がなければ、上述のいかなる性質もたしかに認識しない靈的諸実体に疑いなく類同化するだろう。というのもじっさい、これら

の性質を感覚したり探し求めたりするのは、人間であることは経験上明白だからである。それは逆に、理性的魂が〔49^v〕 範型的理性と想像的思惟を自己自身に向けるのでなければ、かの諸実体の状態も諸実体の知性的快も真実には認識しないのと同様である。

第八節：能動知性について、それはどのようなものか、

可能知性といかに関係するのか

能動知性は理性的魂に流入する。なぜなら、能動知性の光は世界全体に拡散し、他の存在者を整え、万物を維持するものだからである。万物は純粋さによって、その本質に近づき、不純さによってその本質から遠ざかる。実に、首位の精神の後の第一知性は、われわれの実体である質料的知性と一緒になって、世界に流入する。じっさい、かの能動 {知性} の本質は、この可能 {知性} の本性を超えており、教師が生徒を、または父が独り子を、或いはあたかも男が女を愛するごとくに、能動知性は可能 {知性} ないし自然的 {知性} を愛するのである。質料的知性以外のいかなる存在者も、その完全な活動を引き受けることができないゆえに、第一知性は助けるべく質料的知性へとすっかり傾き、それを自己固有の業として、他の諸実体を超えたところに維持する。他の諸実体はそれぞれ、能動 {知性} の流入を、各々の本質の純・不純に応じて受け取るが、完全に受け取ることはない。だが、能動 {知性} に続く知性、すなわち可能 {知性} である理性的魂は、これら諸実体の数には入らない。それゆえまた、先立つ知性が結びつき、それを維持し、導き、照明するのである [50^r]。

第九節：可能知性について、それはいかにして

感覚的魂や能動知性と結びつくのか。

能動 {知性} に続く・第二知性である可能 {知性} は、自然的諸形相を精錬し、物体的諸性質よりも高貴な感覚的魂を呼び覚ますことなしに、自らの力で、それらを自己の本質と普遍的理性へと帰着させることは決して

できない。前述の第二知性は、愛するごとく感覚的魂を抱擁し、ついには表象的になって、それへと傾き続けるのであれば、人間の感覚的魂の方でも逆に、質料的知性に従属し、それを身に纏うことを欲するのである。それからの流入と照明を受容しなければ、将来に残る持続的な、いかなるものも獲得することがないからである。いや、それによって、自己の本質の永続性を支える手段を得るのである。したがって、可能知性と人間の感覚的魂は、双方の欠乏ゆえに、相互に愛し、実体的合一によって同時に結合している。この合一によって人間の存在は完成され、人間の階層が確立される。能動知性と理性的魂もまたこのような関係にあり、お互いを求め、結合し、ほとんど一つの実体になるのである。

第十節：物体の形相は二重であり、能動知性は可能知性を、

可能知性は感覚的魂を支配する。

物体の形相は自体的に存在するか、物体に内属するか二重のしかたであることは、これまでに証明された。後者は、人工物の形相とか、また植物の形相とか、その他何であれ付帶的形相としてである。たとえば、白や黒は自存せず質料に内在する。しかし、その類のなかには、光線のような、すべての知性的形相のうちで現実態に留まる種〔の形相〕もある。光線は照明された物体に内属するけれども、能動者の魂のうちに存続する。以上の通りなので、感覚的魂が獣に内在する場合、その生ける肉体のうちには留まるが、人間の場合には生ける肉体のうちに留まった後〔50^v〕、能動者のうちにも留まる。それゆえ、死によって肉体が滅びたら、植物的感覚的魂も終わるだろうが、それに備わっていた可能知性は、能動者によって保持され持ちこたえるであろう。次に、この能動知性は神によって（能動知性は神の言葉に最も近い）保持されて成り立つ。それゆえ、能動知性は可能〔知性〕を、可能〔知性〕は感覚的魂を、父の息子に対するごとく、教師が生徒に対するごとく愛し導くのである。そのためには、両者とも光からの流入と、永遠で高所の生命からの流入を受けとる必要がある。さらに、

能動知性は理性的魂を産み出したのであるから、それを完成するし、また理性的魂は感覚的魂を解き放ったからには、それを完成する。逆に、可感的なもののどもの知識のために、感覚的魂によって {理性的魂が} 呼び覚まされ、第一位の能動知性からの受容の程度に応じて、可知的なもののども知恵へと進展する。それゆえ、魂が自己自身へと還帰して能動知性を注視したならば、その諸々の働きは能動知性に適合する。ただし、すべてののはたらきが適合するわけではない。というのも、人間の本来的で有徳な活動しか能動知性に帰属しないのであって、他の卑しい不徳の活動は知性的でなく、感覚的魂に付帯するかぎり、感覚的魂に帰着するからである。

第十一節：能動知性は神と可能知性に近接している、神は自己のうちに言葉を含んでいる。また、いかなるしかたで神は直知するのか。

能動知性は、理性的魂を産み出したのであるから、理性的魂を高貴にする。また、{能動知性は} 神的な言葉と密着しているように、理性的魂と密着しているのであるかぎり、理性的魂から離れることは決してない。神的な言葉と能動知性の間に、もし中間者があったならば、{能動知性は} 神的な言葉からの隔たりゆえに、劣ったものとなってしまう、自らのうちに全知識を包含するに十分完全でなくなってしまうであろう。というのは、もし一つの間接者がたまたま割り込むとしたら、その結果、同じ理由で多くの中間者がまた割り込むことになるからである [51]。もしそうであれば、能動知性の光と威厳は減少し、粗雑さが増すことだろうが、このようなことは不可能である。というのも、能動知性はあらゆる被造の実体のうちで最も高貴だからである。また、{能動知性の?} 神的本質 (essentia) は、懐胎された言葉 (verbum conceptum) からいかなる点でも離れることはないが、それというのも、存在者そのもの (ens ipsum) だからである。なぜなら、あらゆる知識を含んでいるからである。他方、理性的魂は或る意味で能動知性であり、能動知性と合致する。というのも理性的魂は、能動知性によって産み出されたからである。また、それから離れることはな

い。というのも、それに近接し、その能動知性に随行し、知性の下位階層として、能動知性の形相を受けとるからである。この質料的知性は、単純で霊的であるので、大いに褒め称えるべきである。とはいえ、前述のように第一位の精神に続く能動知性は、質料的知性より単純であり、質料的知性を含み、精神ないしは首位の知性の助力によって、質料的知性において驚くべき諸々の働きを行っている。この【首位の知性】もまた速やかに可能知性によって直知される。可能知性は、感性界、とりわけその最上階層、そして、かの第一位の知性から到来する、その単純で永続的な運動——隠れているにせよ、明瞭であるにせよ——を注視する。というのも、人間は空気とか動植物、その他のものを眺め、下方世界の諸々の存在者を探求し、高所の真なる世界へ昇ったならば、永続的知性的諸霊が内在し、それらが最上にして純粋な生命に満ち溢れ、己の階層にすべて【の諸霊】を含み、第一位の光からの照明によって沸き立ち、燃え立っているのを内観し、とりわけそこに、他のものどもよりも高貴で優れ、支配する知性を内観する。両世界の創始者によって注入された叡智と力の観照によって、語りえない知性、すなわち可能【知性】は、これらすべてのうちで首位の精神に到達するからである⁽¹⁶⁾。

第十二節：全体的世界は完全である、すると、その

第一の創始者はどのようなものか。

[51^v] 全体的世界は、万物を含んでいるのであって、何かがさらに付け加わることはないであろう。というのも、この上なく完全だからである。だが第一、このような存在者は、付加を容れない。なぜなら、付加されるもの（全体的世界にそういうことが生ずると仮定しての話だが）は、本性的な存在者であるか否かのいずれかであるが、世界の全体が本性によって

(16) この辺り、構文の乱れが見られる。流布版、シャルパンティエ版とも内容が若干ずれている。

あるのだとすれば、本性的な存在者ではない。いかにして、含むものに、すでに先に含まれているものが付加されえようか。また、本性の可能性の圏内にあるということは、何か能動者の働きかけの圏内にもあるということであれば、だが、能動知性を創造した第一の創始者なしには、全体的世界のうちで何も活動しないとすれば、何であれ神によって創出されるものが可能なものであることになる。それゆえに、このような付加物は、世界にとって必然であるか否かである。ところで、もし必然であって、世界がそれを欠いているのであれば、世界は欠損していることになるだろう。しかしながら、知恵ある能動者は欠陥品をつくることはない。ところで、もし付加物が必然でないならば、足されたとしても、余分になるだろう。しかし、第一能動者に余分な活動も欠陥のある力も帰属させてはならない。さらに、このような付加物は、世界の部分であるか否かのいずれかである。じっさい、世界の部分であるならば、世界の外にはない。というのも、世界の外にはなにもなく、万物がそこに含まれていることの証明は、すでに確証されているからである。ところで、もしそれが世界の外にある場合、被造物か否かのいずれかである。さて、もし被造物であるならば、それはまた世界の部分でもある。それゆえ、外的なものではないことになる。他方、被造物でない場合、全体的世界が創造主なしで存在しうるという意味で被造物でないことになるだろう。さて、第一分割に対しては、その付加物は本性的存在者ではないと言うとしよう。非本性的存在者などありえないのに、どうしてそんなことが起こるであろうか。他の可能なものはすべて、そのような〔本来的〕存在者であるのに〔52〕。そしてわれわれには、或るものが万有に先立つのだから、万有は能動者なしではありえないことがわかっている。というのもじっさい、能動者なしで何かが産み出されるということが起こるならば、ましてや、全体的世界は無から存在することになりえようから。だが、何かが無から産み出される可能性はすでに排除されている。というのも、何であれ産み出されたものの存在は、他のものに由来するからである。それゆえ、われわれは結論づけるが、全体的世界

が付加物を受け容れることは不可能であろうし、首位の知性が包含しないような実体が存在するとは想像できないのである。だが、すでにわれわれが証明したように、第一の創始者は知恵あるもの、力あるものであって、彼は何かを産み出すことを妨げられてはいない。というのも、知恵あるものゆえ無知を排除し、力あるものゆえ疲れを知らず、さらに、惜しめないゆえ嫉妬や貪欲によって束縛されもしないからである。それゆえ、何か障害物が邪魔をして、何であれ産み出されうる善きものを、{第一の創始者が}望むのに、産み出すことを減らすことはない。じっさい、まだ時間の長さが妨げることもないし、その{産出の}ために何か他の体勢が欠けているわけでもない。

第十三節：懐胎された言葉、ないし神的精神とはどのようなものか。

全体的世界の第一位の創始者は、精神の知恵の指図と己の善性と権能を決して超えることなく、この全体的世界を創造した。すなわちそれは、本質のうちに全体的世界の個々の実体を含み、完成させ、それらへ流入する。というのも、それは単純さにおいて無限であり、魂へのその流入は限られているとしても、自己のうちに力が欠けていることはないからである。じっさい、それ{第一位の創始者}からの流入を受けとるものは、創造する言葉と比べれば、その実体に等しい類似物ではない。創造する言葉はそれ{第一位の創始者の実体}と一つであり、解き放たれた産物であり、その命令(*praeceptum*)であり、善性であり、意志(*voluntas*)である。またこれは、粗野な可感的なものすべて、及び微細な可知的なものすべてを産み出したのである。というのも、首位の知性によって形成されると想像しうるものは何であれ[52^v]、それによってやはり産出されるものだからである。しかし、首位の知性のこのような命令は、限定された計画(*conceptum*)でもなく、変化・変容を被るものでもない。否じつに、下位に存在するすべての本質を自らの実体において保持している。己からではあるが、知性を媒介にして己に似せて表出される実体もなかにはある。

このような言葉は、想像力も思考も用いない。というのも、このようなことは、第一位の創始者自身にもふさわしくないのであるから、その言葉にもまた決して適合しない。じっさい、別の一つのものに等しいものどもは、互いにも等しい。たとえば、中心から円周に向けて発する諸々の線がそうである。それゆえ、事物のうちの或るものは複合的である。色、音、匂い、味、触覚対象といった可感的性質をそなえたものがそうであって、天体のように高次の物体もあれば、地上の物体のように植物、獣、人間といった低次の物体もある。これらのうちのいずれも、全体はその部分よりも大きく、運動する。それらのうちの或る運動は、天のそれのように反対をもたないが、或る運動は、諸要素のそれのように反対をもつ。一方の運動が他方の運動を妨げるからである。さて、理性的魂は靈的運動によって動きうる実体であり、高所の知性が注入する諸々の靈的な色で塗られている。次に、この理性的魂自身が、己から表出され、認識によって捉えられている他のさらに下方の諸存在者へと転送する。だが、真の産物の本質は、首位の知性自身が証するように、他のすべてのものから解き放たれている。というのも、或るものにおいて、{もとのものが、その} 創造され表出された形象と一致するとしたら、創始者自身、首位の精神——この {精神は}、それ {創始者} と実体を同じくする。なぜなら、それとは、同一ではないとしても、別ものでもないからである——も、それ {創造され表出された形象} と一致してしまうだろうから。さて、もしあなたがもっと明確にとお望みなら、あなたの精神がそこで立ち止まることができる何かが神に先行するか考えてみるがよい。それに、他の何らかの本質が {神と} 結びつくだろうか、実体において似たものとして神へと上昇するであろうか、と考えるがよい。さて [53¹], こんなことは起こらず、神からは周囲で依存するものは遠ざけられているので、あなたは神の本質を、それを真の意味で再現しようような他の {本質} と比較したり結合させたりすることはできないだろう。というのもじっさい、神的知性によって創造され形成された本質はすべて、それよりも後のものであり、それ {神的知性} は、

それらすべてから離れつつ、己の第一位の精神を産み出したからである。それ {第一位の精神} に、考えられるかぎりの、どんな存在 (entitas) をも据え置くと、そこからさまざまな形相一切が出来する。たとえば、本質的存在者や被造物が形成され、諸々の種が生まれるようにと諸々の自然が境界づけられる。したがって、どの本質も他の本質と比較するならば、高次で先行するか、低次で後行するかであり、また、より抽象的であるか、より具体的かであるが、或る本質が第一の創始者に先行したり、高次であつたり、より抽象的であつたりすることはないゆえ、第一の創始者は、己を不足なく表示しうるような、いかなる外的なものももたないことになる。というのも、それ {第一の創始者} が、それ {精神} を種蒔き完成させたのであるかぎり、こちら下方の低次のものも、あちら高次のものも、前述の、それ {第一の創始者} の精神に、触れることはできないからである⁽¹⁷⁾。

(17) 本稿脱稿時(2006年2月28日)に慶應義塾大学商学部名誉教授・箕輪秀二先生の訃報に接した。私の文学部学生・院生時代に先生から受けた学恩と人間的にじつに暖かいご厚誼を賜ったことに改めて感謝し、このささやかな訳業を先生の御霊に捧げたい。思えば、この『人文紀要』に地道にラテン語文献の翻訳を連載する仕事は先生に倣ったものであった。合掌。